

「エルガーだけのプログラムでコンサートを開かれます。プログラミンの意図はなんですか。尾高忠明」僕はイギリスに行くまで、エルガーはほとんどやっていませんでした。当地に行つてすぐに「エルガーの交響曲第一番をやつてください」と言われまして、エルガーが好きではなかったにもかかわらず、実際にやってみたら、とても良かったんです。それから2番も3番も、となつていき、同時に「エニグマ変奏曲」も何度やらせていただきました。その後、なぜだか僕がエルガーの交響曲一番をよくやると日本に伝わつてしまい、日本でエルガーの注文を受ける場合はほとんど交響曲なんです。僕はその度に「エニグマもいい曲なんだけれどな」と思っていました。やっと今回、エルガーらしい、かわいらしい曲をやる事ができるのでとても嬉しいです。「チェロ協奏曲」については、共演するガイ・ジョンストン。この若いチェリストが凄いエルガーを弾くと聞いて、ぜひ一緒にやりたいというのがありました。それから、ウスター音楽祭からの委嘱

エンと定期公演、東京公演両方でエルガープロをやった時、後半の交響曲を聴いて、彼も「これ、あり得ない、英国のオケよりエルガーだ！」と泣いて喜んでくれたけれども。風土が似ている上に、日本人とイギリス人は国民性が似ているんです。

また、札幌はリトル・トウキョウと言われているよ。東京にはない純粋さが残っていて、それがイギリスと合うんじゃないかな、という気がすごくするんです。「エニグマ変奏曲」には、ヴィオラもチェロもソロがあります。ここ数年素晴らしい奏者が増えていますが、特にこのソロを弾く二人の首席は、東京のオケも羨むくらいなんです。ですので、交響曲以上に札幌の良さを聞いていただけたと思います。」

新国の新たな展望

現在は新国立劇場のオペラ部門芸術参与、来年9月からは芸術監督に就任されますが、具体的にどういう構想を練つていらっしゃるのでしょうか。尾高「オペラを『より広い層に、

で書かれた序曲『フロワツサール』。エルガーの才能がここに開花しているということを、意外とみなさんご存じない。これは最初の頃の偉大な作品だと思えますし、コンサートのオープニングにも相応しい。みなさんに喜んでいただけると思います。」尾高さんは、日本人で初めてエルガー・メダルを授与されましたね。尾高「エルガー・メダルは毎年出すのではなく、またイギリス国内で演奏しているだけではもらえないんです。国外にも広めた実績が必要なんです。これまでいただいた賞の中で、権威というよりもむしろほのぼのとしていて、エルガー家からの感謝の気持ちがとても嬉しかったです。」尾高「なぜかこういう風になつちやうな感じです。僕の父はウィーンでワインガルトナーに習いましたし、父亡き後、僕が指揮者を目指し、齋藤秀雄先生に習つたり、N響に来ていたド

より深く』味わつていただきたいです。イタリアもの、ドイツものはもちろん、イギリスにも入って欲しいし、チェコのものもやりたい。演目を組む時に、今まで取り上げた中での再演や委嘱という形で、毎年邦人作品を入れるようにします。自分達の作品を入れないと、日本のオペラハウスの意味がないと思うんです。以前テレビで、中華料理の陳健民さんが自分で作ったマーボー豆腐を食べて『美味しい』と言つたら、アナウンサーが笑つた。陳さんは激怒して、『自分で食べて美味しい、だから食べてください、これが原点です』とおっしゃった。それを見て僕はとても衝撃を受けました。音楽家は演奏する時、自分がその曲を本当に好きでなければいけないと思うんです。

歌手の選定ですが、世界のトップクラスを呼びつても、邦人そしてアジアの歌手も起用していきたい。すでに150名以上の方々に聞かせて戴いています。演出は過度な読み替えがなければモダンな物も歓迎です。公演数を増やし、レパートリー

イツ人指揮者と話したりして、したので、僕の中にどうしてもウィーンに行きたいという気持ちがあった。ご存じのように、ヨーロッパの中でオーストリアとイギリスって遠いですよね。ウィーンにいた頃、イギリスのオーケストラを聞いても『?』というか。東フィルとヨーロッパ旅行をした時に、ウェールズのオーケストラ・マネージャー（彼は以前ウィーンでホルンを吹いていた）がたまたま見に来ていて、『こいついいじゃないか』ということからイギリスと縁が始まったので、あくまでも接点はウィーンだった。ですが、実際に行つてみたら波長が合つて、ここまで続いてしまつたんです。」尾高「ええ、日本のオーケストラで一番向いていると思います。去年はブリテンの『ピーター・グライムズ』も演奏会形式でやりました。音の立ち上がり、実がありつつクリスタル。ロバート・コー

も充実させて、『カルメン』や『フィガロの結婚』などはいつでも聞けるようなオペラハウスにしたい。また、経済的なことが解決するようであれば、字幕を各客席につけたい。それから、学生のための立ち見席。本来のオペラハウスでは、オペラとバレエが一つになつていて、インテンダントがいて、音楽監督が相当数のオペラを振る。そうなるまでのつなぎを僕はしたい。そうなつた時に、新国立劇場は本当の意味でのオペラハウスになると思いますね。」

ホクレン クラシック スペシャル  
札幌交響楽団 東京公演  
尾高&尾高、渾身のオール・エルガープログラム！

11月17日19時、東京オペラシティ コンサートホール  
指揮：尾高忠明  
チェロ：ガイ・ジョンストン  
エルガー

- 序曲「フロワツサール」 op.19
- チェロ協奏曲 op.85
- エニグマ変奏曲 op.36

カジモト・イーラス 0570-06-9960

尾高忠明（指揮者）=2004年～札幌音楽監督。1991年～東京フィル桂冠指揮者。96年～BBCウェールズ響（現BBCウェールズ・ナショナル管）桂冠指揮者。98年～読売日響名誉客演指揮者。2003年～紀尾井シンフォニエッタ東京桂冠名誉指揮者。91年度第23回サントリー音楽賞受賞。97年英国エリザベス女王より大英勲章CBEを、99年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与された。ロンドン・プロムスの常連指揮者の一人。現在東京藝術大学指揮科主任教授、相愛大学音楽学部客員教授を務めるほか、08年9月からは新国立劇場オペラ部門芸術参与、本年9月からは芸術監督代行を務めている。

札幌・東京公演でオール・エルガー・プロを指揮

Tadaaki OTAKA  
尾高忠明（指揮者）

「札幌とイギリス音楽は  
相思相愛」

訊き手=武田奈菜子



©佐藤雅英